



Title	小児看護学実習に対する看護師の認識と影響要因：看護師の認識の因子構造と妥当性
Author(s)	木村, 涼子; 藤原, 千恵子; 高島, 遊子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2015, 21(1), p. 7-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56873
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

小児看護学実習に対する看護師の認識と影響要因 —看護師の認識の因子構造と妥当性—

木村涼子*・藤原千恵子**・高島遊子**・新家一輝**・林みづほ***・植木慎悟****・藤田優一*****・北尾美香*****

要旨

小児看護学実習は、看護学生が対象理解を深め看護技術の体験を進める貴重な場であるが、少子高齢化の影響により実習環境は厳しい状態になっている。そこで、小児看護学実習のよりよいあり方を検討する第一段階として、実習を受け入れている病棟の看護師を対象に、実習に対する認識の構造を明らかにするため質問紙調査を行い、833名からの回答を得た。実習に対する認識を因子分析した結果、『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』の6因子が抽出された。6因子は構成概念妥当性や内容妥当性が確保できたと判断した。信頼性は、5因子の α 係数が0.7程度であり十分に満たしていると考えられたが、『学生がもたらす摩擦』のみが0.55とやや低く、項目内容の検討の余地があると考えられた。

キーワード：小児看護学、実習、看護師、学生

Keywords: Pediatric Nursing, Practical Training, Nurses, Students

はじめに

医療現場で看護師不足が明らかとなり、平成4年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の施行等をかわきりに近年では看護系大学が急速に増加している。一方、厚生労働省¹⁾によると実習施設である有床の病院は減少傾向である。小畠ら²⁾は小児看護学実習において、少子化や核家族化の影響により子どもにかかわる機会が少なくなってきたている学生が、対象理解を深めながら小児看護技術の体験を進めていくことは容易なことではないと述べている。一方、少子高齢化の影響により小児病棟は閉鎖や、成人との混合病棟となっているところも多い。戸崎ら³⁾は混合病棟では入院患児の少なさや短期入院の小児が多いため、看護過程の展開や看護技術の実施において困難なことを明らかにしており、小児看護学実習を行うことはますます困難になってきていると考えられる。

小児看護学実習に関する研究では、学生側からの視点での研究^{4,5,6)}が多く、実習の受け入れ側の視点での研究では、実習指導者を対象とした調査^{7,8)}が行われているのみである。しかし、より効果的な実習を検討するためには、小児看護学実習の実施環境が厳しくなっていく中、学生を受け入れる病棟の指導者以外の看護師を含めて、すべての看護師が学生の実習をどのようにとらえているかを把握する必要があると考えられる。

そこで、その第一段階として、実習を受け入れている病棟の看護師の実習に対する認識の構造を明らかにすることから始める必要があると考えた。

I. 研究目的

より良い小児看護学実習の在り方を検討するための第一段階として、小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師の実習に対する認識の構造を明らかにすることが目的である。

II. 研究方法

1. 対象

対象者は、全国の小児科を有する病院の内、小児看護学実習を受け入れており、かつ調査協力の了承が得られた178箇所の小児科病棟の看護師1955名である。

2. 調査期間

調査期間は2012年10月～12月末である。

3. 調査方法

対象者のリクルートは、独立行政法人福祉医療機構のワムネットを用い、全国の子どもの病院で登録されている741病院の看護部のうち、研究協力の了承が得られた病院の小児科病棟の師長および看護師に調査票を配付してもらった。師長と看護師の質問紙に同じ番号をつけ、同一施設であることがわかるようにした。回収は、無記名で記

*豊中市保健所 **大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 ***大阪大学医学部附属病院

****大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 *****兵庫医療大学看護学部 *****中野こども病院

入後大阪大学宛てに郵送で回収する方法で行った。

4. 調査内容

1) 看護師の属性

看護師の調査票から、①年齢、②性別、③看護経験年数、④小児看護経験年数、⑤病棟の種別、⑥臨地実習指導者経験の有無について回答を求めた。

師長の調査票から、①年間の実習校数、②年間実習学生数、③年間の実習日数、④平均在院日数の4項目を使用した。使用に際し、看護師から得られた調査票の施設番号と照らし合わせ合致したものを使用した。

2) 実習に対する認識状況

実習に対する認識は先行文献^{7,8,9,10)}を基に小児看護学実習に関わる教員2名、小児病棟の実習指導者1名とともに討議して、学生への思いや看護師自身に与える影響に関する37項目を独自に作成した。それらの項目は、「非常に当てはまる(6点)」から「全く当てはまらない(0点)」の7段階で回答を求めた。

5. 分析方法

実習に対する認識については、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。属性と認識との関係はピアソンの相関係数を求め、属性による認識の差異はt検定を行った。データの分析には、IBM SPSS Statistics Ver21を用いた。

6. 倫理的配慮

調査票には、無記名、回答の自由意思、学会や論文での公開、参加しない場合での不利益が無いことを記載した。また、調査票の返送を持って同意を得たものとした。本研究は大阪大学保健学倫理委員会の承認を得て行った。

III. 結果

対象者1955名のうち1027名から得られた(回収率52.5%)。そのうち回答に不備があったもの、師長からの回答が得られず施設情報が得られなかつた194名を除外し、833名を有効回答とした(有効回答率81.1%)。

1. 看護師・病棟の属性および実習の受け入れ状況

看護師の年齢は、 36.3 ± 9.1 歳(*range* 20-62)であり、性別では男性27名(3.2%)、女性806名(96.8%)、看護経験年数は、 14.0 ± 8.8 年(*range* 1-41)、小児看護経験年数は、 7.1 ± 6.1 年(*range*

1-37)であった。臨地実習指導者の経験は、経験あり466名(55.9%)、経験なし359名(43.1%)、無回答8名(1.0%)であった。

病棟形態では、「小児のみの病棟」が477名(57.3%)、「成人との混合病棟」が292名(35.1%)、「その他」57名(6.8%)、無回答7名(0.8%)であった。平均在院日数では、1900日の外れ値3名を除いて算出すると 11.8 ± 21.5 日(*range* 2-150)、年間の実習校数は 3.2 ± 3.7 校(*range* 1-10)、年間実習生数は 79.4 ± 41.0 名(*range* 9-208)、年間実習日数は 104.3 ± 54.5 日(*range* 24-340)であった。

2. 実習に対する看護師の認識

1) 看護師の実習に対する認識についての得点分布(図1)

各調査項目についての割合は図1のとおりである。「非常に当てはまる」から「少し当てはまる」を合算した割合が90%以上になっていたのは、「学生には気持ちよく実習させてあげたいと思う」「自分も教えてもらったので後輩を指導するのは当たり前と思う」「自分のアドバイスを学生が生かして実習していると嬉しい」であった。「学生が関わることで患児がわがままになることがある」「学生がいると事故が起こりやすい」では当てはまるを合算した割合が20%以下になっていた。

2) 看護師の小児看護学実習に対する認識の構造(表1)

実習に対する認識は、主因子法による因子分析を行った。実習に対する認識37項目は、天井効果・フロア効果ともに見られなかつたので、因子分析(主因子法)を行い、固有値1.00以上の因子を抽出し、スクリープロットで6因子が妥当であると判断した。さらにプロマックス回転を行い、因子負荷量が低い項目、複数の因子に高い負荷を示す5項目(図1の#の項目)を削除し、各因子の項目すべてが因子負荷量0.40以上となるまで繰り返した結果、表1のように32項目・6因子が抽出された。累積寄与率は、42.9%であり、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性は0.88であった。

因子1は、実習を通して学生や学校の教員と関わることで、看護師たちは自分自身のスキルアップにつなげていることから『実習を糧にした看護師自身の成長』と命名した。因子1の α 係数は0.88であった。因子2は、学生が実習に来ること

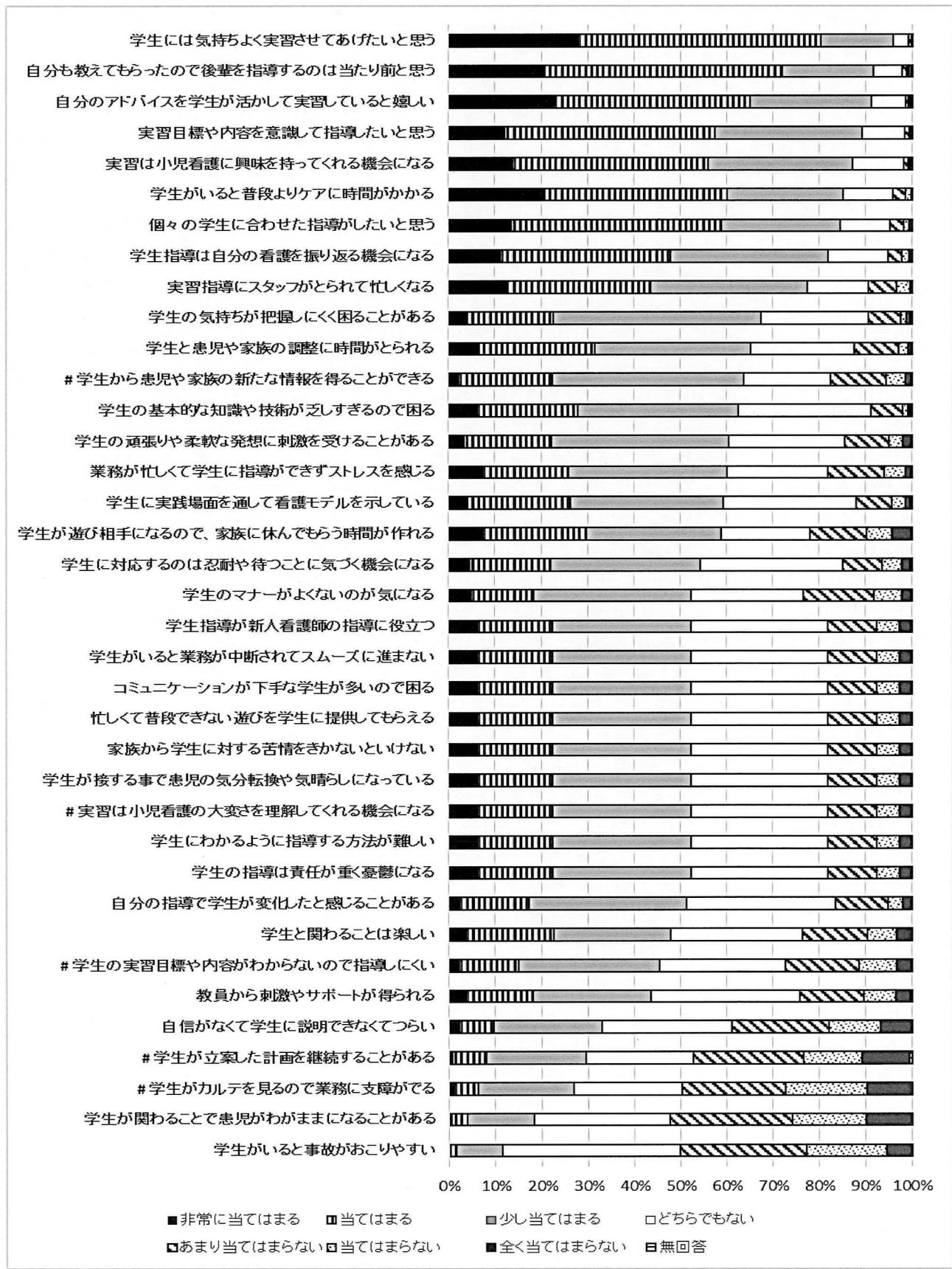


図1 看護師の実習に対する認識 37 項目の分布
(#は因子分析での除外項目)

で病棟での日常業務の遂行に支障が生じる内容から『いつも通りにできない負担感』と命名した。 α 係数は 0.72 であった。因子 3 は、学生が子どもとその家族に関わることで生じる良い効果であるため『子どもや家族へのケア効果』と命名した。 α 係数は 0.69 であった。因子 4 は、実習を行う学生自身の社会的な未熟さや学習不足に対する戸惑いから『学生の能力や態度に対する困惑感』と命名した。因子 4 の α 係数は 0.68 であった。因子 5 は、学生をいかに指導すればよいかという悩みや指導面での困難感であったため、『学生指導に対する困難感』と命名した。因子 5 の α 係数は 0.68 であった。因子 6 は、学生と子どもや家族の間で生じる問題の調整を担う看護師を感じている内容であるため『学生がもたらす摩擦』と命名した。因子 6 の α 係数は 0.55 であった。因子に含まれる項目内容について、研究者間で協議し、内容妥当性を確認した。

3. 属性と実習の受け入れ状況による看護師の実習に対する認識との差異(表 2)

看護師の実習に対する認識の 6 因子について、看護師の年齢・看護経験年数・小児看護経年数・平均在院日数・年間実習校数・年間実習学生数・年間実習日数とのピアソンの相関関係を算出した結果、いずれの項目とも相関関係は見られなかった ($r = 0.00 \sim 0.23$)。

病棟の形態による実習の認識の差異では、6 因子すべてで有意差は見られなかった ($t=0.32 \sim 1.48$)。また、臨地実習指導者経験の有無では、表 2 のように 4 因子で有意差があり、『実習を糧にした看護師自身の成長』、『いつも通りにできない負担感』、『子どもや家族へのケア効果』では経験ありの方が得点は高く、『学生の能力や態度に対する困惑感』では経験なしの方が得点は高くなっていた。

IV. 考察

1. 看護師の実習に対する認識の特徴

実習に対する認識のうち、「学生には気持ちよく実習させてあげたいと思う」「実習目標や内容を意識して指導したいと思う」では当てはまるが 90%以上を占めていた。学生が実習している病棟は、小児看護を意識して働いている看護師が多く、実習についても理解し、学生たちが小児看護について効果的に学べるようにしてあげたいと思っている看護師が多いことが推察される。また、「自

分も教えてもらったので後輩を指導するのは当たり前と思う」「自分のアドバイスを学生が生かして実習をしていると嬉しい」も同様に当てはまるが 90%以上の項目であった。看護師たちは学生を自分たちの後に続く後輩と捉え、看護を伝えたいという気持ちが高いことが示唆されている。堀ら¹¹⁾は、成人看護学実習の指導においても同様の認識を持っていると報告していることから、小児看護学実習のみならず他の領域実習でも実習指導に対する共通の認識であると考えられる。米田¹²⁾は、看護師が学生指導の担当の有無にかかわらず、学生へ看護を伝えたいという思いがあると述べている。また、3 年目以上の先輩看護師が新人看護師に指導するプリセプター制度などもあることから、業務を先輩に教えてもらいながら一人前になってきたという実感にも影響されていると予測される。金子ら¹³⁾は、実習指導の際の学生からの新鮮な質問が指導者の刺激となる、学生を指導することで自分の看護を見つめなおす機会となることから、指導者が学生とともに成長できていると述べている。

しかし、「学生がいると普段よりケアに時間がかかる」と認識している看護師も多かった。畠山ら⁸⁾は、学生の指導を担当することによって、普段の業務にさらに学生指導が加わるため、実習指導者の負担の大きさを示している。一人前の看護師であればすぐにできる業務であっても、学生が受け持つことで指導や見守りが必要であること、学生自身がケアを行う場合は不慣れなため時間がかかることや、失敗した場合のフォローなど、一つ一つのケア自体に時間がかかるなどを多々経験していると推察される。

「家族から学生に対する苦情を聞かないといけない」「学生が関わることで患児がわがままになることがある」は当てはまるという割合が低くなっていた。これらは小児看護学実習独自の内容であるが、予想よりも看護師の認識は少なくなっている。病院という日常生活とかけ離れた特殊な環境下では、子どもらしさを出すことができない子どもが存在する。看護師も子どもが求める時に子どもと十分関わりたい気持ちがあつても、なかなか時間を確保することができない現状がある。そのことが、時間が十分ある学生が子どものペースを尊重して関わることを、子どもの安心感や自己主張の表出の好機になっていると肯定的な受け止めに繋がっていると思われる。

表1 実習に対する認識の因子構造

命名 a係数	項目	因子					
		1	2	3	4	5	6
因 1 実習を糧にした 看護師自身の 成長 0.883	学生指導は自分の看護を振り返る機会になる	.721	-.031	-.059	-.032	.179	-.014
	個々の学生に合わせた指導がしたいと思う	.666	.098	-.043	.055	-.037	-.138
	学生と関わることは楽しい	.659	-.049	-.037	-.097	-.221	.024
	自分の指導で学生が変化したと感じることがある	.656	.044	-.041	.152	-.328	.173
	自分のアドバイスを学生が活かして実習していると嬉しい	.645	.177	-.003	.050	-.011	-.199
	教員から刺激やサポートが得られる	.641	-.067	-.096	-.126	.164	.180
	学生に対応するのは忍耐や待つことに気づく機会になる	.622	-.065	-.112	.085	.140	.161
	学生の頑張りや柔軟な発想に刺激を受けることがある	.620	-.003	.057	-.200	.112	.146
	学生に実践場面を通して看護モデルを示している	.575	.148	-.020	.113	-.316	.045
	実習目標や内容を意識して指導したいと思う	.566	.066	-.001	.160	.007	-.268
因 2 いつも通りにで きない負担感 0.724	学生指導が新人看護師の指導に役立つ	.543	-.047	-.011	.001	.131	.176
	学生には気持ちよく実習させてあげたいと思う	.538	.045	.096	-.110	.107	-.294
	実習は小児看護に興味を持ってくれる機会になる	.451	-.033	.271	.109	-.047	-.171
	自分も教えてもらったので後輩を指導するのは当たり前と思う	.405	-.097	.210	.166	-.019	-.181
因 3 子どもや家族へ のケア効果 0.690	実習指導にスタッフがとられて忙しくなる	-.084	.721	.004	-.136	-.033	-.015
	学生がいると業務が中断されてスムーズに進まない	-.256	.660	.092	.059	.054	.143
	学生がいると普段よりケアに時間がかかる	.160	.575	-.062	-.023	.002	-.022
	学生と患児や家族の調整に時間がとられる	.178	.567	-.072	-.007	.060	.118
因 4 学生の能力や 態度に対する 困惑感 0.679	業務が忙しくて学生に指導ができずストレスを感じる	.173	.492	.002	-.071	.140	-.035
	忙しくて普段できない遊びを学生に提供してもらえる	-.064	.057	.782	-.087	-.015	.043
	学生が接する事で患児の気分転換や気晴らしになっている	.048	-.036	.698	.003	.024	-.036
	学生が遊び相手になるので、家族に休んでもらう時間が作れる	-.042	-.079	.558	.017	-.081	.209
因 5 学生指導に対 する困難感 0.681	学生のマナーがよくないのが気になる	-.014	-.095	.015	.649	.011	.278
	コミュニケーションが下手な学生が多いので困る	.065	-.014	-.037	.640	.010	.242
	学生の基本的な知識や技術が乏しすぎるで困る	.076	-.021	-.047	.610	-.074	.178
	学生の気持ちが把握しにくく困ることがある	.123	-.078	-.053	.591	.303	.086
因 6 学生がもたらす 摩擦 0.551	学生の指導は責任が重く憂鬱になる	-.048	.172	-.088	.113	.679	.004
	学生にわかるように指導する方法が難しい	.171	-.036	-.003	.196	.678	-.101
	自信がなくて学生に説明できなくてつらい	-.055	.027	.080	-.160	.602	.135
	家族から学生に対する苦情をきかないといけない	.009	.125	.064	.293	-.073	.561
因 7 学生がもたらす 摩擦 0.551	学生が関わることで患児がわがままになることがある	.057	-.077	.045	.195	.050	.483
	学生がいると事故がおこりやすい	-.032	.042	.035	.315	.007	.476

因子相関行列	1	2	3	4	5	6
1	.072	.468	-.016	-.052	-.111	
2		.042	.596	.189	-.011	
3			-.137	.210	.091	
4				-.012	-.236	
5						.286

表2 臨地実習指導者の経験による実習に対する認識の差異

実習に対する認識	臨地実習指導者 経験の有無	N	M	SD	t
実習を糧にした看護師自身の成長	経験あり	466	55.7	8.5	13.09 ***
	経験なし	359	47.9	8.5	
いつも通りにできない負担感	経験あり	466	20.6	4.2	5.31 ***
	経験なし	359	19.1	3.9	
子どもや家族へのケア効果	経験あり	466	15.0	3.2	4.76 ***
	経験なし	359	14.0	3.2	
学生の能力や態度に対する困惑感	経験あり	466	10.3	3.1	-3.11 **
	経験なし	359	10.9	2.8	
学生指導に対する困難感	経験あり	466	12.2	2.8	-1.10
	経験なし	359	12.4	3.0	
学生がもたらす摩擦	経験あり	466	6.9	2.7	-0.58
	経験なし	359	7.0	2.5	

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

2. 看護師の実習に対する認識の構造

実習に対する認識の因子分析では、『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』の6因子が抽出された。『実習を糧にした看護師自身の成長』は、学生と関わることによって、学生たちの頑張りや実習を通して学生だけでなく自分自身の看護の振り返りや責任感や喜びにつながると捉え、『子どもや家族へのケア効果』は学生の存在が子どもや家族に与える良い面を捉えた両因子ともプラスの面の認識である。『いつも通りにできない負担感』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』は、学生の実習から生じる業務負担や指導上の困惑感などマイナス的な側面である。このことから、看護師は小児看護学実習に対してプラスの面とマイナスの面の両方を認識しており、畠山ら⁸⁾と同様の結果を示している。

また、6因子は、因子分析の累積寄与率42%やKMOが0.8以上であることからサンプリングの適正基準を満たしており、構成概念妥当性や内容妥当性があることで、妥当性は十分にあると考えられる。信頼性係数は『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』ではほぼ0.70程度であり、信頼性はあると考えられるが、『学生がもたらす摩擦』が0.55とやや低く項目の検討の余地があると考える。

6因子は、看護師の年齢や看護経験年数の属性、年間実習校数などの実習の受け入れ状況および病棟の形態や平均在院日数などの病棟の状況の影響を受けていないことから、どの病棟の看護師の実習に対する認識をも量れるものであると考えられるが、臨地実習指導者経験の有無による影響が見られることから、指導者経験がある者とない者は分けて分析する必要があると考えられる。

3. 研究の限界と課題

今回の調査は、実習を受け入れている病棟にいる看護師を対象に質問紙調査を実施したが、指導者経験のある看護師と指導者経験の無い看護師がほぼ同じ割合になっており、両方の立場から小児看護学実習の認識を明らかにできる項目尺度を作成することができた。看護師の実習に対する

認識の構造を明らかにできたことで、実習を受け入れている病棟の看護師の認識がどのような要因によって影響されているかを明らかにすることに活用できると考えられる。影響要因を明らかにすることは、学生の実習が学生の利益のみではなく、実習を受け入れている看護師の利益にも繋がるための一助になる可能性がある。

また、小児看護学実習は、学生が関わる子どもや家族にも有効である視点も重要であり、それにに関する研究も進めることができ今後の課題であると考えられる。学生と看護師と子どもや家族という3方面での有効性を視点において、より良い効果をもたらす実習のあり方を検討することが重要であると思われる。

V. 結論

小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師833名を対象に、看護師の実習に対する認識を因子分析した結果、6因子で構成されていることが明らかとなった。

6因子は、『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』であり、小児看護学実習に対するプラスの面とマイナスの面の両面を認識していることが示された。6因子は構成概念妥当性や内容妥当性も十分であり、5因子の信頼性は0.7程度で信頼性も確保できたが、『学生がもたらす摩擦』のみ0.55とやや低く検討の余地があると考える。6因子は看護師の属性や実習の受け入れ状況および病棟の状況に差異は生じないが、臨地実習指導者の経験の有無によって差異がみられた。

謝辞

本研究に貴重なお時間を割いて調査票に回答していただきました看護師の皆様と看護師長様、ならびに快くご協力してくださいました看護部長様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2010). 平成22年医療施設動態調査・病院報告の概要
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/10/dl/shisetsu.pdf>
- 2) 小畠ゆみ、五十嵐伸子、石澤美和、梅田君子、

- 加藤由美子、上村幸子、郷更織、櫻井照美、浅川淳子. 看護師が学生に期待する小児看護技術の到達レベル. 小児看護 (38)、167-169. (2007)
- 3) 戸崎美穂、高野政子. 混合病棟における小児看護学実習の学生の学びと課題. 日本看護学会論文集、看護教育 (39)、72-74. (2008)
- 4) 糸井志津乃、恩澤美恵子、上松恵子 (2012). 小児看護学実習で急性疾患を受け持った学生の学び. 目白大学健康科学研究、5、67-72.
- 5) 小口多美子、関美知子、吉村由紀、菅谷千恵子、宮口恵美子、山本郁子 (2002). 小児看護学実習において学生が直面する困惑. 日本看護学会論文集、小児看護、33、148-150.
- 6) 島田真由美、北川悦子 (2005). 子どもと遊びの演習を通しての看護学生の学び—遊ぶ援助の体験から看護実践能力を育む—. 日本看護学会論文集、看護教育、36、353-355.
- 7) 辻山洋美、阿部さとみ、渡部真奈美、長田暁子、飯村直子、伊藤久美、江本リナ、筒井真優美、安田恵美子、小村三千代、福地麻貴子 (2001). 施設における看護系大学小児看護学実習の受け入れ状況. 日本小児看護学会誌 10(2)、9-15.
- 8) 畠山智草、遠藤芳子 (2010). 学生が実習することによる小児病棟への影響. 北日本看護学会、12(2)、61-68.
- 9) 阿部さとみ、長田暁子、辻山洋美、渡部真奈美、飯村直子、伊藤久美、江本リナ、筒井真優美、安田恵美子、福地麻貴子、小村三千代 (2002). 看護系大学における小児看護学実習に関する臨床実習指導者の認識と課題. 小児看護、25(4)、522-528.
- 10) 細田泰子、山口明子 (2004). 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因. 日本看研究学会雑誌、27(2)、67-75.
- 11) 堀理江、大塚眞代 (2013). 成人看護学領域における実習指導者の指導観. ヒューマンケア研究学会誌、5 (1)、19-26.
- 12) 米田照美、沖野良枝、前川直美 (2008). 実習指導者講習会後の実習指導への意欲・関心の継続と自己努力に関する要因—受講者・未受講者・担当・未担当での比較—. 日本看護学会論文集、看護管理 (39)、99-101.
- 13) 金子美香子、鈴木のり子、菅野寿美子 (2005). 臨地実習指導者の指導に対する意識—やりがいと関心度、自信度、負担度の関係—. 日本看護学会論文集、看護教育 (36)、227-229.